10. 聴覚障害教育の充実

①「ろう・難聴者」としてのアイデンティティを育むことを教育の柱にすること

回答:日常的に対話や協働の場を設定し、主体的に課題と向き合い、解決する力や自己認識を深める力を育むための支援を行われており、アイデンティティの形成につながる。

②聴覚総合支援学校における手話言語環境を整備すること

回答:幼児児童生徒一人一人の障害の状態等を考慮して、手話を含めたコミュニケーション手段の選択・活用を図り、聴覚障害のある人が円滑にコミュニケーションを図れるようにすることが大切。

③聴覚総合支援学校の専門性の向上に資するため、言語聴覚士を加配すること

回答:教育採用選考検査において、「特定資格」に言語聴覚士を設定することなど努めている。

④難聴特別支援学級等の担当者全員を対象に聴覚障害に特化した悉皆研修を設けること

回答:初めて難聴特別支援学級を担当になった教員は、年５回の悉皆研修を実施。聴覚総合支援学校で言語指導や教材づくりなどの研修を実施したり、勤務校に特別支援教育指導員が出向き、専門性に基づく指導助言を行っている。

⑤高校入試における英語のリスニングについて、難聴生徒が不利にならない配慮すること

回答:入試の手続きを実施要領に記載しており、出願前に中学校長等から志願先の高等学校に連絡し、志願先高等学校が県教育委員会と協議する。配慮を必要とする受験生ごとに、その実状をふまえ、配慮内容を決定している。



＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

令和８年度赤い羽根共同募金運動始まる





10 月１日(木)９時より富山駅南北自由通路にて開催。出席者は約 50 名。富山県聴覚障害者協会から中橋、塩見、砺波地区ろう友の会から中西佳子さんが参加しました。

セレモニーでは、まず富山県共同募金会会長から開会のあいさつ、続いて富山県知事より激励のメッセージ。次は、全日空職員による①厚生労働大臣→県知事・富山市長、②中央共募会長→県共募会長・富山市共募委員会長といったメッセージ伝達を行いました。

伝達式の後、富山駅南北自由通路内を３ヶ所に分かれ、募金箱、配付チラシ、のぼりを持って、10 時頃まで街頭募金活動を行いました。

昭和 22 年(1947 年)に始まった第１回共同募金運動から第 80 回までの共同募金連動ポスターも展示され、共同募金運動の歴史を伝えました。